

タイトル 『天使が降る』

筆名 葉山礼加（はやまれいか）

あらすじ 夢で天使に逢ってから、アカリは空から降る雨や雪に「あなた」を見るようになった。詩を書くことで孤独を凌ぐ日々。大雪と地震の夜、封じていた記憶が揺さぶられ、降り続けていた「あなた」の正体が、明らかになる。

概要 散文詩的な文体と小説を融合させた幻想的な作品です。東日本大震災について描いています。

文字数 4963文字

夢のなかで天使に逢ってからというもの、私は少しだけ変わったような気がする。別に聖者になったわけではない。空から降ってくる雨の一粒一粒にあなたを見出せるようになったのだ。あなたの笑顔には一点の曇りもなく、目が合えばこう囁きかけてくる。

いつも傍にいるよ。

あなたが降ると、周りのひとたちは傘を差すか、家に籠もるかのとどちらかを選ぶが、私は空に向かって語りかける。時に雨粒に宿るあなたの表情に憂いを見つけると、やり場のない気持ちでいっぱいになる。川沿いの散歩を終えて家路につくと、引き出しのなかから思い出のペンダントを見つければ涙を落とす。大抵のものは処分したと思っていたのに、誕生日やクリスマスにももらったプレゼントだけは残してある。だからと言って強い未練から、あなたが見えるようになったのではない。私は天使しか持っていない、天使の眼を譲り受けたのだと信じている。あなたはまだ降っているだろうか。窓から外を見やったら私は目を丸くした。

雪だ。あなたが白く美しく凝固されている。

思い出したのは私たちがまだ高校生だった頃。一本の傘を共にして歩く途中、急に雨が雪に変わった時のことを。珍しいね、と笑い合ってお互い空を見上げていた。傘の上にはぼたぼたと落ちてきた大粒の雪。あるとき語り合ったのは雪の前世について。きっと優しいひとが誰かに寄り添うために生まれ変わったに違いない、そんなことを話していたような覚えがある。もちろん積雪量の多い地域ではそんな綺麗言など言っていられないかもしれない。仙台の空は気分屋だ。雪が見たいと願ってもそう簡単に見られるものではない。

私は思っていた。あなたほど優しいひとなら、いつか雪に生まれ変わるのではないかって。しかし、私たちはある日を境に離れ離れになってしまった。

あれから長い年月が経った。その間、私は様々な職を転々とし、結局無職に陥った。人間関係を築くのが人一倍苦手だったから。憧れていた東京での一人暮らしも金欠により断念し、仙台の実家に戻った。周りの友人はほとんど結婚してゆき、私は売れ残ったお菓子のようにひとりぼっちになった。そんな私を両親はいつも心配し、時には五月蠅いくらいに干渉してきた。私はひとに逢わない時間帯を見計らって、家の近くの川沿いや、公園などを散歩し、行く先々にノートを持参して詩を書いてきた。夢を温めてきたわけではない。ただ詩を書くことで自分なりの呼吸ができたし、自らの生を確認することができたので創作は何よりの生き甲斐だった。詩のノートはいつも鍵付きの引き出しのなかに封印していた。羞恥心が邪魔をして、誰にも見せられないノートだが、私にとっては何れっきとした生きてきた証である。

いまは空から舞い降りてくるあなたの美しさを詩に書き留めようと必死になっている。手が止まっても声は届くに違いないと思って、空に向かってあなたの名前を連呼する。私の顔は真っ白くなり、やがて呼吸が苦しくなる。それでも諦めずに呼び続けていると、頭上に降り積もった雪が段々溶けて水と化してゆく。あなたが傍にいる限り、孤独なんて存在しないのだと私は喜びに震える。

ベランダから部屋のなかに戻り、窓を閉めるとストーブの温かい空気が充満した。まだ寝る時間ではないが、私はさなぎのように布団にくるまった。枕元には一枚のポートルェート。結晶化されたあなたは窓の外でひらひらと舞っている。いくぶん軀は冷えてきたけど心の奥は温かい。開けっ放しだった部屋のドアを閉めようとすると、リビングから光が漏

れているのがわかった。

「あら、帰ってきてたのね。寒いからお部屋あったかくしてなさいね」

「うん、お母さんも」

微かにテレビの音が聞こえてくる。耳を澄ますと女性アナウンサーが淡々とした口調でニュースの内容を伝えている。

「県内全域、大雪警報です。明日朝にかけ警戒を——」

あなたがたくさん降ってくる。とてつもない喜びがこころの奥底から湧き上がってきて、私を支配する。いま外に出て大地の上で寝ようものなら間違いない凍死してしまうだろう。でもそれはあなたと私の心中なのだと思う。もしも天国で一緒になれる確証があるなら、当たり前のように実行するだろう。あなたは雨であり、雪である。ストーブの音で、あなたの声が遮断されている。せめて姿だけでも見ようとカーテンを全開にすると、凄まじい光景が広がっていた。あなたが家々や、車や、道路をすべて真っ白に染めている。暫く窓の外を眺めていた私は天井へと視線を移す。ぼんやりと蛍光灯を眺めていると長く伸びた紐が大きく揺れ始めた。

「地震！」母の音が聞こえてきた。

私は咄嗟に布団を頭から被り全身を震わせる。どれくらい揺れているかすらわからない。怖い。怖くて堪らない。こんなとき一緒にいて欲しいあなたは窓の外。私は掌を合わせ神様に祈る。カラーボックスの上に乗せた小物類がガタガタと音を立てている。私は布団の隙間から枕元のポットレイトを見つめる。

怖いよ……助けて……

収まらない振動のなか、何かがフラッシュバックした。

様々な命が奪われたあの日。私は留守番を頼まれて愛犬のパンと一緒にソファで横になっていた。みしつと音が鳴った次の瞬間、まるで地球が悲鳴をあげているかのようになり、叫んでは揺れ、あらゆる崩壊が繰り広げられた。やがてブレーカーが落ちてあらゆる光が消え、家中が漆黒の闇に包まれた。忘れないけれど、忘れられない恐ろしい記憶。そのなかに抜け落ちていく部分がある。無意識に頭から消去しようとしているのか、それとも記憶喪失になっているのかはわからない。それらがあなたに関わる事柄であるということは何となく憶えている。ようやく揺れが収まった。ふとドアの方に気配を感じ、目をやると母が不安そうな顔で立っていた。

「大丈夫だった？ 震度三だったみたいよ。大雪と地震がセットでくるなんて何だかちよつと怖いね」そう言って母は窓の方を見る。続けざまに「カーテン閉めないの？」と訊いてきたので私は「閉めない」と呟いた。どうして？ が予想通りやってくる。私は何も答えられなかった。母に言ってもわからないだろうから、俯いたまま無言を貫いた。姿を大きくしたあなたを横目で見て、空は揺れなかったよね、と問い掛ける。玄関のドアが閉まる音が聞こえた。同時に駆け寄ってゆく足音。耳を澄ますと父の音が聞こえてくる。

「ただいま」

「おかえりなさい。雪ひどかったでしょ。地震もあったし」

「もう散々だね。アカリは？」

「部屋にいるよ」

どたどたと廊下を歩いてくる音と同時に父の音が近づいてくる。

「おい、アカリー。入るよ」

「ちよっと待って」

私は急いで窓を閉じ、ドアを開けた。

「おかえり。お父さんどうしたの？」

「アカリの詩は読んだことがないけどいつも一生懸命に書いてるってお母さんから聞いてね、参考になるかと思って宮沢賢治の詩集を買ってきたんだよ。やっぱり賢治の詩はいいよ。悲しみをテーマにして書かれたものが多いから感情に訴えかけてくる。ほら、読んでみて」

そう言って父は『春と修羅』と題された詩集を手渡してきた。この寒さのなか持ち帰ってきたわりには本から温もりが伝わってくる。

「ありがとう」

父はバスタオルを頭にぐしゃぐしゃと擦りつけながら部屋から出ていった。

私は渡された『春と修羅』をばらばらと捲る。長丁場になりそうだったので、一度、本を閉じようとした瞬間、あるページで手が止まった。タイトルは『無声慟哭』。文字を追ってみると、この詩は誰かとの死別をあらわしているような気がした。感情移入しそうになった私は頭を左右に大きく振り、本を閉じる。父はどうしてこんな悲しみに満ちた詩集を私に読ませたかったのだろう。夢で天使と逢う前、私は暗闇を宿したような目をしていたという。その後あなたが生きていくことがわかってから、悲しみという名の水は濾過された水のようにずいぶんと飲みやすくなった。それでも、この『無声慟哭』は読めない。その理由を父はわかっているのだろうか。父に悪意はないとわかっているけど、勘ぐってしまったのは私が神経質になっているせいなのか。

台所から皿を洗う音が聞こえてきた。あいにく今日は手伝えそうにない。がちがちとした音に混じって両親の会話が聞こえてきた。意識して小声で話しているようだが、静寂な部屋ではすべてが筒抜けだった。

——アカリ、元気ないね。

——うん。でもとっておきの詩集を渡したから大丈夫だと思うよ。

——大丈夫ってなにが。

——あれを読めばもっといい詩が書けるようになって元気も出るって。

——そんなもんかしら。わたしにはわからない。あの子ほとんど部屋に引き籠もってばかりでどうなっちゃうのかしら。もういい年だというのに働きもしないで。

——もっと理解してやれよ、お前も。

——そうしてるつもりよ。お父さんも明日雪掻きあるんだし早く寝たら。

——そうだな。

会話はそこで途切れた。私はいたたまれない気持ちになって目を伏せる。私は人間が雨や雪に生まれ変わること信じている。輪廻転生についてそこまで詳しくは知らないのだが、前世も来世も信じている。私はいつもこうやって呼吸をしてゆく。思い起こせば自作の詩をひとに読んでもらったのは、あなただけだった。当時はよく言っていたものだ。「私の本当のころは詩によってでしか表せない」と。あなたは私の詩を好き好んでくれた。いまでも私は空に向かって詩の朗読をする。誰もいない夜の公園や、ペランダの片隅で、息をするように朗々と。知人に詩のことを話すと、「趣味ばかりに走るのもいいけど、仕事

とか結婚とかも、しっかり考えたほうがいいと思う」と一蹴された。けれど、少なくとも私にとって、避けられない悲しみや憂いを乗り越えてゆくには、詩が必要不可欠だった。

あなたが降りしきるなか、窓から見える家々はすっかり光を失って、真夜中が訪れたことを告げていた。私はあなたに買ってもらったペンダントに触わって記憶の扉を開けてみることにした。様々な場面が蘇ったが、ひとつだけ強固に閉じた扉があった。押しても引いても微動だにしない禁断の扉。よくよく覗き込むと鍵穴があった。様々な鍵を使ってみるが、どれもが合わない。

そろそろ外に出て、あなたに逢いにいこう。雪に生まれ変わった、かけがえのないあなたに。寝静まったと思われる両親を起こさないよう、ゆっくりとドアを開け、摺り足で廊下を歩く。こんなにたくさんのあなたが降るチャンスは滅多にないかもしれない、そう思いながら私は玄関へと足を進める。亡霊のように気配を殺すことができた私は小さく笑う。ブーツを履いて玄関のドアを開けると、目の前に純白の世界が広がっていた。至るところにああなたが降り積もっている。背の高い庭木は元の色彩を棄て去り、巨大な彫刻のように佇んでいる。時の流れに比例して、あなたは大地を真っ白に染めてゆく。勢いよく吹きつける風に揺られ、素顔を隠したままで。私は童心を取り戻したように辺り一面を駆け回った。息が切れてきたところで私は倒れ、白い庭の上で大の字になる。たとえようのない幸せが躰のなかを駆け巡り、私はあなたと愛し合っていることを実感した。あなたは沈黙しているが、きつと共に喜んでくれているに違いない。気分が高揚し、思わず笑い出しそうになったとき、微かに声が響いてきた。

——寒いから部屋にお戻り。

声の主は紛れもなくあなただ。私は白銀の空に向かって返事をする。

——もう少し傍にいさせて。

——ひとりにしてごめん。

——ひとりなんかじゃないよ、こうして一緒にいるんだから……

一瞬、間が空いた。固唾を呑んで返事を待っていると、寒さに躰が震え始めた。

——僕は、あのと死んだんだ。

突然の言葉に私は息をすることさえ忘れてしまった。

——あなたは死んでなんかいない……これからもあなたの詩をずっと……

——アカリ、愛してるよ。さようなら……

はつきりと声が聞こえたとき、雪が、あなたが、一瞬にして降りやんだ。瞳から大粒の涙が次から次へと溢れ出る。声は出なかった。慟哭しながら禁断の扉を開けると、走馬灯のように記憶の欠片が形を成し、巨きなスクリーンが現れる。映像が動き始めると鮮明に思い出す。あなたの命を奪った震災の惨劇を。私は白い息を前方に伸ばしながら雪の上に詩を書いた。人差し指が震えていた。